

宮沢賢治記念館通信

発行 〒025-0011 岩手県花巻市矢沢1-1-36

宮沢賢治記念館

☎ (0198) 31-2319
FAX (0198) 31-2320

宮沢賢治没後90年特別企画

『チェロでつづる宮沢賢治の世界』

米澤ポランの廣場のこと

元・米澤ポランの廣場代表 本間 哲朗



昨年6月のこと、「宮沢賢治学会イーハトーブセンター事務局長のハレヤマ」を名乗る方から電話がありました。「賞選考委員会の選考の結果、第8回宮沢賢治学会イーハトーブセンター功労賞を米澤ポランの廣場に贈ることとなった」。ええっ!? 何がどうしてこうなったとはこのこと、我が米澤ポランの廣場（略称、廣場）というのは単に仲間がつどって好きな宮沢賢治作品を読んできた、ただそれだけなのです。でも功労賞は何よりの誉れ、そして有終の美…。廣場の設立は1990年6月で、それから月に一度の例会を欠かさずに33年と4か月、昨年10月の400場（回）という節目をもって活動に終止符を打つ、受賞はそういうタイミングでのことでした。

筆者が当時の職場に呼びかけて6人ではじめた読書会でしたが、参加者は賢治に惹かれているかどうかは不明、入れ替わり立ち代わりの時期が続きました。そのうちひとり去りふたり去りして、少ない時にはたった3人で会をつないだこともありました。よって筆者はいつも、これぞと思うひとに、賢治と一緒に読まないか、おもしろいぞと期待を寄せ声をかけていたものです。小さな地方圏のこと、同好の会を続けていくことのむずかしさを思い知らされていました。

皆がつどって楽しく、しかも主体的に賢治作品を読むにはどうしたらよいのか…、それを思っていました。知恵を出し合って、賢治ツアーの企画や会員が講師となつての文化講座の開催、賢治の世界を色や形で表現すべく造形展や記念行事の開催等の工夫はしました。でもそれより何より会のスタイルとしてレポーター制を採ったことは大きかったと思います。レポーターは会員が平等に輪番に担うこととし、課題作品の選択と提示にはじまり、

作品の基本情報、語句の調べや自身の解釈をレポートとして作成し、あわせて読書会当日の進行を担いました。

広場のもうひとつの機軸は節目節目に記念誌を作ること、読んできた足跡を記録として残すことを大切にしました。記念誌Ⅳ（150場 2002年）からは従来のエッセーから作品論を主としたものにしました。エッセーは賢治にた^{すく}だよう空気を掬えば済みますが作品論となるとそういきません。

とはいえ近年、定着していたひとでも、子育てで時間がとれない、年をとったことだし、介護がある等の理由で退会したり足が遠のいたりして先細りが見えてきました。そんな状況を打開すべく妙案は遠隔地からの参加でした。代表の呼びかけにこたえて2020年の9月から5名が仲間に加わりました。事前に課題作品を読んでもらって、現地の例会前に読後感をメールにて回収、それを例会において発表、それをさらに広場通信に現地会員のものと併せて載せることで読書会を共有したのです。例会の進行は現地の者が代わるにしても、順繰りのレポーターも担当してもらいました。そうして最終的に会員は11名となりました。

33年余をふりかえれば、広場を通り過ぎたひとは実に92人でした。

そして今から3年前の正月の例会において、節目の記念誌の発行とセットで歩むべく読書会は今後100場先の450場（2027年末）に到達するのはまずむずかしい（引退を表明する会員も出てきていた。牽引役の意欲が減退してきていたのも事実）、それなら直近の400場をめざして、みんなで一緒に着地しようと提案したのです。はじまりがあれば終わりはいつかはやって来るもの、楽しさやクオリティーとともにカタチを大切にしてきた広場のこと、いつの間にかの消滅というのではなく、終焉にふさわしい終わり方をしたいと思ったのです。

そうして400というゴールに到達した記念誌『米澤ポランの広場Ⅸ 最終号』…、巻頭には賢治の「(集會案内)」、各自の「小論」、賢治や広場への思いをつづった「つどいの広場」、それから資料として例会を記録した直近50場

の広場通信、設立以来の参加者および課題作品の全記録等を掲載しました。手前味噌ながら、それはスタイリッシュなものになったと思います。

米澤ポランの広場の本拠は賢治がはばたいたフィールドと同じ落葉広葉樹林帯、いわゆるブナ帯の中です。夏分は漆黒の闇の中で火を焚いて、冬場はすぐそばの拙宅で薪ストーブのかたわらで賢治を読む…、ヨタカが「キョキョキョキョキョキョ」とよく啼きました。フクロウの「オッホ、オッホオッホ」、時にトラグミの悲し気な笛も聴きました。

33年余の時間にはいろんなことがありました。2003年7月、広場に欠かせなかった会員を59歳で失ったときは悔しかったです。そうした悲しさも埋めるべく、乗り越えつないできたのが仲間たちでした。それぞれが心づくしの手料理などを持ち寄り、そこにはのどを潤おすワインやビールなどもあつての談論風発、言いたいことを言い、共感や捉え方のちがいの妙味を味わいつつ、そうして各々がどれほど賢治の豊饒な世界に遊んだことでしょう。その意味では、米澤ポランの広場というのは稀有な賢治ワールド、唯一無二のカルチャーコミュニティだったようにも思います。

そんな宮沢賢治の会が山形県は米沢という小さな町にあったということです。

*なお、記念誌『米澤ポランの広場Ⅸ 最終号』は全編、web上で公開しています。興味の向きはお訪ねください。

サイト「ドアリラ」→signal

→記念誌『米澤ポランの広場Ⅸ 最終号』

サイト「宮沢賢治の詩の世界」

→米澤ポランの広場



▲例会 2023年7月

賢治童話を彫刻して、そしてヤマナシ

彫刻家 栗原俊明



ぎんどう公園にある4人で共同制作した「風の又三郎群像」と、宮沢賢治記念館前庭の「よだかの星彫刻碑」に私が携わることができたのは、偏に宮澤清六様のお蔭です。そのご縁から、素人ながら栃木・宮沢賢治の会〈ぎんどうの会〉や宮沢賢治学会イーハトーブセンターと係わらせていただき、今日に至っています。

彫刻ではどちらかというと抽象的な作品をメインに制作をしていますが、具象的な石彫としては2002年に日光杉並木公園に「カン蛙」（宮沢賢治の童話「蛙のゴム靴」より）を黒御影石で、また2004年には宇都宮市にあるカトリック松が峰教会に「カン蛙のガーゴイル」を、大谷石の仲間では最も耐水性が高い深岩石で制作しました。

実は、「カン蛙」については未だ割り切れない思いが残っています。「蛙のゴム靴」の蛙たちは、その描写の特徴から明らかにトノサマガエルです。しかし、「カイロ団長」に登場するトノサマガエルの意地悪さがどうしても脳裏から離れず、悩んだ末、足指に吸盤があるアマガエルにしてみました。ですから、詳しい方からご指摘を受けければ、ゴメンナサイというしかありません。また、題名の「カン蛙」についても、本当は「雲見」にしようかと最後の最後まで思い悩んだのですが、結局決心がつかず「カン蛙」にしてしまったことをいまでも少しだけ後悔しています。

この20年ほど日光を中心に地元栃木で毎年のように個展を開催してきましたが、宮沢賢治の童話をテーマに小品を、という画廊からの要望により、「宮沢賢治 童話の世界」などとサブタイトルをつけ、粘土を素焼きしたテラコッタによる作品を数多く手掛けました。賢治童話を彫刻する際私がいつも心掛けているのは、当然といえば当然ですが、童話を繰り返し読んで自分なりのイメージを形にしていく、ということです。

例えば、2017年秋のテラコッタ展では「銀河鉄道の夜」や「なめとこ山の熊」、「双子の星」などを題材にしましたが、中でも「土神ときつね」の樺の木をどのように表現するかには大変苦労し

ました。因みに、賢治さんのテキストには次のように書かれています。

《それはそんなに大きくはありませんでしたが幹はてかてか黒く光り、枝は美しく伸びて、五月には白い花を雲のやうにつけ、秋は黄金（きん）や紅やいろいろの葉を降らせました。》

結局私は、専門外である樺の木の種類にはとらわれずに、童話の記述に素直に従って塑像を作りアクリルガッシュで着色することにしたのでした。

今回、「宮沢賢治記念館通信」に寄稿させていただくことになり、どうしても気になって、原子朗氏の語彙辞典を確認しようと思い立ちました。私の手許には『宮澤賢治語彙辞典』と『新 宮澤賢治語彙辞典』しかなかったので、『定本 宮澤賢治語彙辞典』を入手し確認をしたところ樺は山桜、樺桜であろうとのこと、《童「土神と狐」の「奇麗な女の樺の木」はサクラをカバと呼ぶ好例だろう」となっていました。研究者の先生方も日々研究成果を更新されるので、参考にするには最新版のチェックが欠かせないことを改めて学びました。

「土神ときつね」の樺の木は、《幹はてかてか黒く光り、枝は美しく伸びて、五月には白い花を雲のやうにつけ》るのです。何度も読み返すうち、似たようなくだりをどこかで読んだ気がしました。あの美しい二枚の青い幻燈、「やまなし」の「一、五月」の章です。

《『いゝいゝ、大丈夫だ。心配するな。そら、樺の花が流れて来た。ごらん、きれいだらう。』

泡と一緒に、白い樺の花びらが天井をたくさんすべつて来ました。》

そういえば、ヤマナシもバラ科だったなあ、と思いました。

余談ですが、私の家の庭には知人から分けてもらったヤマナシの木があります。高さは3mほど。そのほかに、鉢植えが4本あります。手入れをしないと虫がついてしまうので適当に枝をはらったら、昨年は4月末から5月初めにかけて可憐な白い花を咲かせました。まだ実は生りませんが、去年ようやく実ったという兄弟のヤマナシの実を一つもらったので、我が家の木もいつか実をつけるのではないかと期待しています。

日光市のいまは閉業になってしまった小百小学

校には、シンボルツリーだった樹齢300年と伝わるヤマナシの大木があります。昨年10月、栃木の賢治の会の仲間3人と訪れたところ、なんと梨の実がたわわに実り、辺り一面数え切れぬほどたくさんの実が落ちていました。ヤマナシの実は一般的には直径が3、4cmくらいですが、この実は5、6cm、大きいものは7、8cmもあります。スーパーの袋いっぱい拾ったので、友人にお裾分けしたりしばらくの間部屋に飾ったりしましたが、中には賢治の会の例会に持参して参加者に配ったり、ジャムやヤマナシ酒にして味わった者もいます。

育苗ポットにいくつか種を播いたので、私はいま「さるかに合戦」の蟹の心境です。



▲「カン蛙」(日光杉並木公園)

結 い — 賢治が繋ぐ心と心 —

「ざしきぼっこの会」に入って

農業パート 大森 敦子



私と賢治さんの出会いは、小学生の頃に童話を読んだことでした。動物達が出てくる不思議な世界で、怪しい音のする、それでいて物悲しい結末のお話し。

「立派な人なことは確かだけど、なんだか難いお話しだなあ」

そう感じた私は、伝記を読むことはあれど、あまりすすんで作品を再読することはありませんでした。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」しかしこの言葉が強烈に残り、学生時代も賢治さんに憧れはあったものの、その後なんの行動も無いまま気づけば主婦になっていました。

子育てと日常に追われる中、ふと「そういえば花巻に住んでいるけれど、賢治さんのことをよく知らないままだなあ」と思い当たり、ネットで見かけた「賢治カフェ」に出向いてみることにした

のです。それが、「宮沢賢治・花巻市民の会」と、「花巻弁による賢治方言作品の朗読グループ・ざしきぼっこの会」との出会いでした。

ざしきぼっこの会の朗読で、私は初めて童話の中の世界が眼前に広がるのを感じました。地元の方による方言により、登場人物がイキイキと人格を持って動き出しました。私はそこから月に一度のこの会に通い始め、賢治さんの生涯とお話しを学びました。そのうちに「あなたもやってみる？」とお声がけいただいたのです。私は「いいんですか？やります。」と、二つ返事で朗読の世界に飛び込むことになりました。

ざしきぼっこの会の先輩方は長年多方面でご活躍されてきた大先輩ですが、素人の私にも丁寧にご指導いただいています。はじめは声を出すこともままありませんでしたが、一番には朗読の読み方は国語とは違い「聞かせるお客さん」がいることです。賢治さんが花巻の自然からもらってきた、美しい景色やキャラクターの表現を、皆さんに思い浮かべてもらわなければなりません。作品の理解を深めるため解釈について語り合う時間は、毎度新しい発見があり楽しい時間です。朗読をするようになって様々な作品に触れ、賢治さんに対する印象も変わりました。自然と同じくらいの人間に対する細かな観察眼、ユーモアや風刺

を知りました。まだまだ未熟ですが少しずつ発表の機会もいただき、経験を積んでいます。

私は子育てで中断していた音楽サークルへも復帰し、農業パートも始めました。農民芸術概論を实践できたなら、という憧れの再燃をもってです。全国津々浦々にファンの多い賢治さんですが、地元花巻の市民が賢治さんの作品と生き方を伝えていけたなら、やっぱり素敵なんじゃないでしょうか。そして多くの方に、文字にとどまらない賢治さんの魅力に触れていただけたらいいなと思っています。



腹を痛くしたのを記憶しています。

そうこうしているうちに、月日は経っていきました。なんとなく大人になった私は、演劇活動を通して、盛岡で旗揚げした劇団「黒猫舎」に出会います。女性だけで構成された劇団で、なんと、“宮沢賢治作品のみ”を舞台化させているのです。私は黒猫舎と出会ってしばらくの間、こちらの劇団で修行を積ませてもらいました。賢治童話に登場する役を演じ、表現する喜び・難しさを噛みしめながら、毎週末の稽古に精を出しました。代表はじめ、劇団員達とああでもない、こうしたらいい、などと賢治さんの世界観に沿いながら丁寧に稽古を進めていきました。そして、お客さんの層はというと、老若男女問わないということ。中でも、特に私がやりがいを感じていたのは、“子ども達の前で演ずること”でした。お芝居ですから、台本は持たず、シンプルな舞台装置、小道具や衣装で表現していきます。子ども達に賢治さんの世界を伝えるには、難しい言葉の理解を補える、身体表現や感情で表していかなければ、伝わらないと感じました。ここでの大切な経験が、現在、講師として依頼頂いている「賢治の世界」セミナーへ繋がっているのだと思っています。

信頼できるピアニスト、大金雅子さんと一緒に、花巻市内の様々な小学校に行かせて貰っていま

賢治さんが語りかけてくれるもの

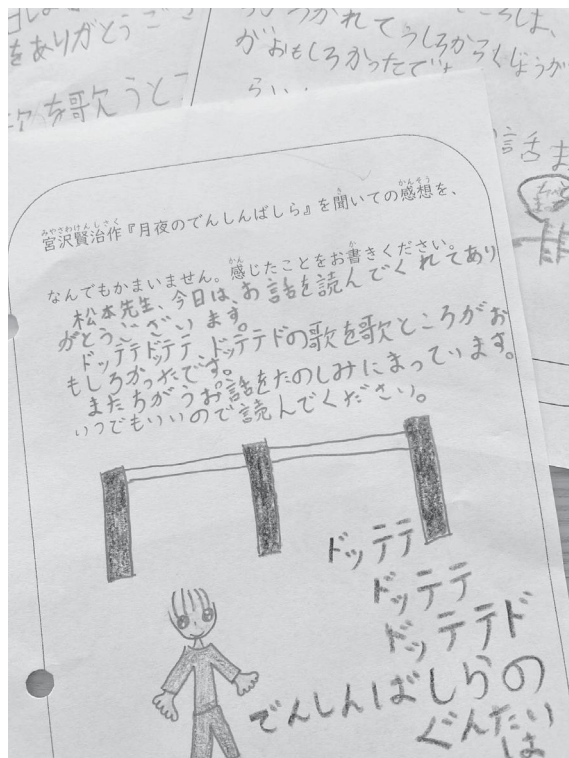
学校図書館支援員 松本亜季



私と賢治さん。はじめてのしっかりとした出会いは、花巻市大迫町出身の敬愛する亡き祖母から、「雨ニモマケズ」を詩吟で習ったときだった気がします。そこからどんどん宮沢賢治という大きな存在に

心惹かれていきました。

盛岡に生まれた私は、小学校の国語の教科書で宮沢賢治作品について学習しました。記憶しているのは「やまなし」。そして、詩「雨ニモマケズ」の暗唱です。“クラムボン”ってなんだ？当時6年生だった私には、理解不能でした（今も定かではありませんが）。詩の暗唱でも、発表日の朝にみんなの前で間違えずに全文を発表できるか、お



す。どの学校の子ども達も真剣なまなざしで、時に笑いありで、私たちのピアノと朗読に耳を傾けてくれます。そう、きっと賢治さんは沢山の童話を通して、こう語ってくれているのです。「自分

なりの答えを出せる大人になって」と。私は自分の解釈を信じて、これからも賢治さんの心を届けていきたいと思っています。

■「賢治の世界」セミナー 2023



13年目となる「賢治の世界」セミナーを、花巻市内の小学校、中学校、高等学校を会場に開催しました。(市内15校16会場1,177名《昨年実績:16校17会場1,356名》)。会場の雰囲気もコロナ前に戻りつつあります。

今年度、初めて参加して下さったのは、ものがたりグループ☆ポランの会の皆さま。童話「ツェねずみ」と「注文の多い料理店」の2作品を朗読していただきました。朗読に加えて、身振り手振りや表情の豊かな変化が素晴らしく、子どもたちはもちろん先生方や保護者の方も、夢中になって観劇していました。

8月末のセミナーだった為大変暑く、会場を体育館から視聴覚室へ変えていただいたのですが、先生から講師の方と子どもたちの距離感が丁度よかったというお声をいただきました。今年の夏はとて暑い期間が長く続いたため、各学校の先生方にはセミナー会場の配慮などもご協力いただき、本当に感謝いたしております。今後も、さらに多くの学校に「賢治の世界」をお届けしていきたいと思ひます。

■「賢治の世界」ワークショップ2023

「冬の胡四王山散策」



花巻市民を対象に宮沢賢治ゆかりの地を歩く、「賢治の世界」ワークショップ。6月に開催した「初夏の胡四王山散策」に続いて12月10日に開催し、30代から80代までの17名に参加していただきました。

森林インストラクターの高橋修さんによる山の案内は、分かりやすくユーモアに富んでいて、参加者の方からとても人気があります。今回のワークショップでは、事前にカラーリボンを木の枝に付けたものに樹木の名前を書いておき、参加者が分かりやすいように工夫がされていました。

何度も参加しているけれど、毎回何か新しい発見があっておもしろいという声もお聞きます。賢治作品に登場する木々にも触れる機会がありました。「なめとこ山の熊」「税務署長の冒険」には、クロモジ。「雪渡り」には、ホオノキの芽。「ひかりの素足」には、枯葉が落ちきる前の栗の木など、実際に見ることができました。ぜひみなさんも胡四王山の散策を楽しんでみてはいかがでしょうか。

■宮沢賢治没後90年特別企画 「チェロでつづる宮沢賢治の世界」



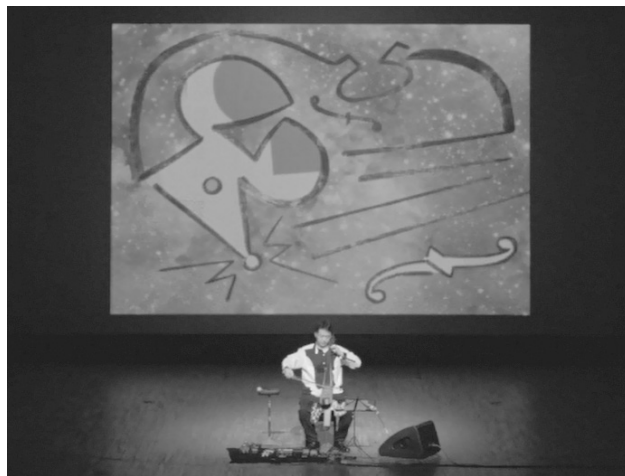
令和5年11月25日に花巻市文化会館大ホールにて、花巻市民を対象にチェロコンサートを開催しました。普段は宮沢賢治記念館に展示されている賢治愛用のチェロを、世界的に有名なチェロ奏者の宮田大さんが演奏してくださいました。



第1部、コンサートのはじまりは、花巻北高等学校合唱部と遠野高等学校音楽部のみなさんによる美しい合唱。高校生の若く瑞々しい感性の歌声は、ときに優しくときにエネルギッシュで、会場を魅了しました。宮沢賢治が作曲した「星めぐりの歌」や「月夜のでんしんばしら」など、童話のイメージが浮かんでくるようです。

第2部は、宮田大さんによるチェロリサイタルです。宮田さん愛用のストラディバリウスのチェロは、温かく深みのある優しい音で、来場された方からは「まるで宮田さんの体の一部のような」という声もありました。ピアノの西尾真実さんとの息もぴったりで、会場全体がふたりの作り出す音楽に心地よく包まれました。曲は、サ

ン＝サーンスに始まり、ラフマニノフ、プッチーニ、カッチーニなどのクラシック音楽の他に、「天空の城ラピュタ」や「ハウルの動く城」といった、若い世代に馴染みのある曲も演奏されました。

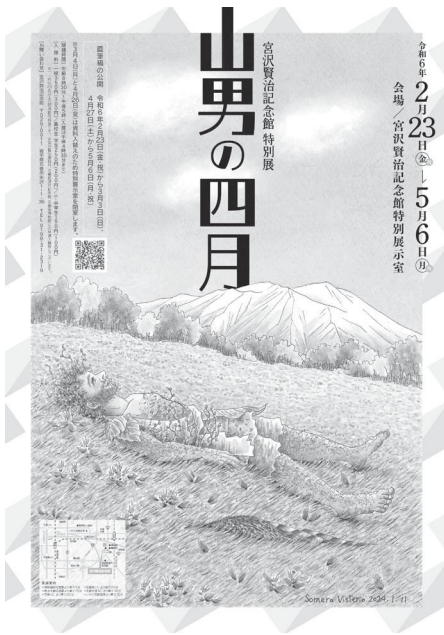


第3部は、絵本音楽プロジェクト「セロ弾きのゴーシュ」の九十九太一さんによるエレキチェロの演奏です。小学生のころに宮沢賢治の童話「セロ弾きのゴーシュ」と出会い、不器用なゴーシュが成長していく姿に共感を覚えたのだそうです。舞台には「セロ弾きのゴーシュ」をイメージした映像が流れます。九十九さんは、動物達とともにゴーシュが奏でる音楽を、独創的に表現してくださいました。時にくすっと笑いを誘うような演出もあり、会場を物語の世界観へ引き込みます。九十九さんのユニークでオリジナリティ溢れるお人柄を感じられる、素晴らしいステージでした。

第4部は、いよいよ賢治が愛用していたチェロを、宮田大さんが演奏します。(写真：表紙) 宮田さんは、「このチェロの音を賢治さんの声だと思って聞いてみてください。」と話してくださいました。チェロは人の声に最も近い楽器と言われています。まるで賢治さんが歌っているかのような、しっとりと味わい深い音でした。実際に賢治さんが弾いたチェロの音色をこんな風に伝えることは、宮田さんだからできるのではないかと思います。「星めぐりの歌」、「荒城の月」は、宮田さんのソロで。「もみじ」、「夕やけこやけ」、「浜辺の歌」は、第2部に引き続き西尾真実さんのピアノとの演奏です。そして最後に、「本日まで来場いただいたすべての方に感謝をこめて」と、「ふるさと」を聴かせてくださいました。

《特別展》のお知らせ

◆特別展「山男の四月」



期間

令和6年2月23日（金・祝）～5月6日（月・祝）

「山男の四月」は生前に発表された唯一の童話集『注文の多い料理店』に所収されている作品の一つです。9編からなる童話集の原稿は残念ながら現存しませんが、「山男の四月」については初期形といわれる草稿が残っており、その構想の様子をみることができます。童話集掲載の発表形と比較しながら作品の魅力に迫ります。

自筆草稿の公開：

令和6年2月23日（金・祝）

～3月3日（日）（10日間）

来館者の声

記帳ノートから

No. 417～420



★仙台在住の大学4年生（旧盛岡中学）出身です。一人旅でじっくり見に来ました。（推し活&聖地巡礼もかねて 笑）賢治先輩の作品などの世界を見てみると、ほんとうに大きな優しさに包み込ま

れているような、ホッとする気持ちになります。賢治先輩大好き！こんな推しがいて幸せです。

★石川県から来ました。米津さんの「カムパネルラ」が、宮沢賢治さんの「銀河鉄道の夜」からインスパイアを受けたと知り、興味を持ちました。想像以上に楽しかったです。

★東京都品川区から賢治検定を受けに来た、中学2年生女です。3歳のころからずっと宮沢賢治さんが大好きで、ほぼ毎日賢治さんのことを考えています。私の住んでいる周りには、ほとんど賢治さんを感じられるものがないのですが、花巻はどこもかしこも賢治さんだらけで、とても幸せでした。遠いので、まだ岩手に4回、記念館には3回しか来ていませんが、将来は花巻市に住もうと思っているので、そうしたら毎日来ます！賢治さんの影響でチェ口を始めました。いつか岩手で弾くのが夢です。これからも素敵な展示、楽しみにしています！

★岩手で生まれた私が、71歳にして初めて来ました。23歳で岩手を飛び出し、こうして歳を重ねて故郷をめぐる幸せの中にいます。岩手は人も土地も温かい。大好きです。



編集後記

令和6年1月1日に起きた、能登半島地震で被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。寒さが厳しい中、被災地では大変な苦勞をされておられることを思うと、胸が痛みます。一日も早く皆さまの生活が落ち着きますことを願ってやみません。

さて、今回寄稿を頂きました本間様と栗原様は、仲間と一緒に宮沢賢治作品を読み深める会を、長年牽引してこられました。全国には沢山の「宮沢賢治の会」がありますが、会の継続には並々ならぬ苦勞があることと思います。近年では、コロナウイルス感染症の影響もあり、会の活動が思うようにできないといったこともありました。それでも、寄稿文を募集して会誌を作成したり、遠隔地からの参加を工夫したりしながら続けてこられたこと、本当に素晴らしいです。私たちの世代も、インターネットやSNSに頼りすぎず、実際に顔を見て言葉を交わし楽しむことの大切さを、考えていきたいと思っています。（Y.S）